

《研究論文2》

## 中国民間信仰と儒家における「孝」

中 本 梅 衣\*

### はじめに

現在、中国では共産主義の下で、祖先祭祀などは封建的なものとして一切捨てられ、従って「孝」は父母が在世のときに孝養を尽くす家族道徳という部分だけが残っている。しかし、孝が感情として血縁主義の基礎であり、中国人特有の血縁的団結を形成する精神的支柱となっている点では古今変わらない。最近も、「世界華人孝親シンポジウム」が開かれ（2004年12月）、中国七都市における孝道の実態について報告された。その結果、父母の面倒を見るとした人は85%に上った<sup>(1)</sup>。伝統的孝観念が根強い中国人は、たとえ今後工業化社会に脱皮したとしても相当長期間持続することであろう。

儒教は、この中国伝統の「孝」を基礎にした思想であるが、思想として洗練されただけに、民間レベルで語られる「孝」のあり方とは乖離する面も生じている。これまでは、思想研究は思想研究、文学研究は文学研究、それぞれの分野に限られたものであったように思われる<sup>(2)</sup>。本稿は、むしろこの乖離に注目して、この二つの「孝」がどのように関係しているかについて考察するのを目的とする。

### 1. 儒家における「孝」

「孝」には二つのレベルが想定されよう。一

つは低次的なレベルのそれであり、物質的に父母を満足させることである。他の一つは高次的なレベルのそれであり、物質的に満足させた上で、父母を敬愛する気持ちをもつことである。儒家の提唱した「孝」は言うまでもなく後者の孝である。『論語』に子游が孔子に孝を問うたとき、孔子は「近頃の孝は、ただ物質的に十分に養うことを指している。人は犬や馬すら立派に養っている。しかし、尊敬の気持ちがなければ、動物に対するのと同じだ」（為政篇）と答えた。また、子夏が孝を問うたときに、孔子は「色難」（為政篇）と答えた。つまり、父母の前での柔和な顔つきが最も大事で、それは心の中に本当の愛情があってこそできることなので、それが難しいのだと言うのである。

孝については、『論語』の他の箇所でもたびたび言及されている。「（孝とは）自分が病気にならないようにして父母に心配をかけないことだ」（為政篇）、「若者は家の中では（父母に）孝行を尽くし、家の外では（年寄りに）従いなさい」（学而篇）とあるように、孝の根本は父母に敬意をもって仕え養うことである。さらに、孝とは父母が存命している間はもちろんのこと、「死後は礼に従って葬り、礼に従って祭ることだ」（為政篇）、「三年間、亡父のやり方を変えなければ、孝といえる」（里仁篇）とあるように、死後の父母にも及ぶものである。

『孟子』にも、「堯舜の道は、孝弟に尽きる」（告子上）とあり、孝を上古の理想的な天子の時代における基本的な道徳であったとする。

\*日本学術振興会特別研究員

従って、天子である舜の父が殺人罪を犯したら、舜は父にいかに対処するかとの問いに、孟子は「天子の位を、履き潰した靴を捨てるのと同じように投げ棄てて、こっそりと父を背負って海辺に逃れ、生涯喜んで父に仕え、天下のことは意にかけない」(尽心下)と答えている。また、孝が死後の父母にも及ぶという点では、『論語』の趣旨を承けて、「親不孝には三種類あるが、後継者がいない(ため祖先の祭祀を絶やしてしまう)のが、一番の不孝である」(離婁上)といい、『論語』に較べると、祖先への祭祀と子孫の継続とを結合して孝を考えるようになっていく。

『孝経』<sup>3)</sup>になると、『論語』や『孟子』に見える「孝」の思想をよりいっそう推し進め、「もろもろの刑罰があるが、不孝の罪が最も重い」(五刑章)とあり、この精神は歴代の法律に継承された。『孝経』の冒頭に「孝は、徳の基本である。……父母から与えられた身体髪膚の保全が孝の始めであり、自立して孝を實踐して、後世に名を残し、父母に名誉を帰するのが孝の最終目的である。孝は、親に仕えることから始まり、君に仕えるようになり、立身出世が最終目的である」(開宗明義章)といい、「人の行為は孝が最も大事である」(聖治章)とする。孝は徳行の出発点であると同時に帰着点でもあり、すべての徳行は孝に基づいていることを意味する。さらに「孝によって天下を治める」(孝治章)とあるように、孝は個人の徳行に止まらず政治の要ともされる。また喪親章では、孝を親の死後にまで延長し、喪祭を孝とすることも見える。

身を守るに始まり名を顕すに終わる『孝経』の精神は、中国の古今を貫く権力思想の源泉となり、歴代政権の座にある者は、治国平天下の基礎を庶民の家庭の安定に求め、あらゆる方法を講じて孝を勧誘した。漢代には、『孝経』は支配階級の子女に広く読まれ、後漢から魏晋・

南北朝にかけては、至孝が官吏登用の際の推薦項目の一つとなり、隋唐時代に至ると、孝は皇帝が有すべき人格性の一つにまで高まっていた<sup>4)</sup>。さらに隋唐に完成した律令の中にも、孝の思想が強く反映しており<sup>5)</sup>、孝は国家支配を支えるイデオロギーとして位置づけられるようになった。

宋代以降、孝の強調は「宗族」(親族集団)結合の広がりによって、社会的・現実的な基礎を得ることになる。結合の根拠は、父子の「分形同気」を同一の祖先から分かれた人々にまで拡大したもので、この結合を維持する規範として、生前の孝養だけでなく、死後の祭祀までも含めた孝が機能することになった。この理論化を行ったのが朱子である。朱子は「父子は本もと同一の気をもったもので、ただ一人の身が分かれて二つに成っただけのものである」(『朱子語類』卷十七)と述べている。そして、「祭祀を奉る者がその子孫である以上、畢竟同一気である。だから感通の理があるのだ」(『朱子語類』卷三)といい、気を同じくする子孫が先祖を祭れば、先祖に「感通」というのである。共通の祖先を定めそこから分派した族人の範囲を確定するために、族譜を記載することも広く行われた。

孝の理論化はその解釈をめぐる哲学的な論争を展開するようにもなった。『論語』学而篇有子の語「孝弟為仁之本與」は、古注では「仁の本為るか」とするが、仁を理と考える朱子の新注『論語集注』では、「仁を為すの本か」と解する。孝弟は仁に則った愛の情が肉親に対して発動したもので、すべての情を仁に合致させる端緒となるというのである。それに対して陽明学は、心の主体性をより強化し、自然な心情の流露に道德性を見る。血縁的結合に由来する孝は、そうした真情のシンボルであった。さらに共同性全般も血縁的一体感の拡大においてイメージされ(「万物一体の仁」)、孝弟こそ「仁

の本」だとされた。

## 2. 民間信仰における「孝」

前節で述べた儒家における「孝」は思想的倫理的なものであったが、民間では、「孝」は常に「天」の信仰という宗教的なものと結びついて考えられていた。

中国人の信仰の中で、歴史的に深く人心に根付いたものとしては、「天」の概念において他にはないであろう。中国の人々にとって「天」は宇宙の全てを司る最高の神であり、また人間の善悪に対して公正な賞罰を下す存在でもある。「人事を尽くして天命を聴く」、「好心は好報有り、悪は悪報有り」と信じられているように、「天」は道徳的な人格神として崇められ、敬われてきた。所謂「好報」「悪報」は即ち天からの賞罰である。

民間では、風・雨・雷・干魃なども天の意志を代表して賞罰を行う神々の仕業であると長く信じられている。もしある人が雷に打たれて亡くなったならば、それはこの人が重大な罪を犯して天罰を招いた結果なのであると考えられる。もしあるところで久しく干魃が続いたり、或いは逆に洪水に遭うならば、官僚は天に降雨や晴れることを祈ると同時に自分の職務の不備を反省し天の許しを求め、場合によっては自分を真夏の太陽の下に晒したり、甚だしくは自らを燃やしてしまうのである<sup>(6)</sup>。

このように、「天」は自然と人事の一切を主宰する至上神である。皇帝にしても天の子に過ぎず、毎年天を祭らなければならない。庶民は日常生活において天と密接に関わり、新年祖先を祭る際には必ず天を敬い、男女が結婚するときに必ず天を拝み、病気や災害が起こったときに天に助けを求め、冤罪を蒙ったときに天に明察を願い、いいことやめでたいことがあったときに天に感謝し、また、旧暦1月9日を天の誕

生日とし、線香を立てて供え物をする。人々は天に対して、敬うだけでなく、人格を認めて、親しみさえ込めている。これは「老天」「老天爺」「天公」という天の別名からも窺える<sup>(7)</sup>。

天は善行を奨励する公平な神なので、善行の第一のものである孝をなす人に対しては当然手助けをするはずだと考えられている。民間では天が親孝行を助ける様々な話が流布している。

天が親孝行を助けるのは大体以下の四つの場合である。

- 一 日常生活の中で、親がある飲食を要求し、孝子はそれを提供できない。
- 二 家が貧苦である或いは飢饉に遭い、食糧が足りない。
- 三 親が久しく病に罹り、なかなか治癒しない。
- 四 親を喪い、埋葬費用が出せない。

第一の場合は、孝子は心力を尽くして親に仕える。が、親の或る飲食に対する要求を満足させることができず、懊悩する。このとき、天からの助けがあったことが『後漢書』にある姜詩夫婦の話に見られる。これは、民間信仰に「孝」が現れてくる初期のものである。

姜詩は母に仕えて至孝であり、妻の姑仕えも篤かった。この母は長江の水を飲むのを好んだ。水は家から六、七里離れていた。妻はいつも流れに遡って水を汲んだ。……姑は鱈が好きだったが、独りで食べることは好まなかった。夫婦はいつも努力して鱈を提供し、隣のおばさんも呼んで一緒に食べた。すると、家の側に突然泉が涌いた。その味は長江の水のようで、毎朝二尾の鯉が出できて、毎日二人の膳に供した。(巻七十四「広漢姜詩妻」条)

或いは父母が季節外れの食べ物好み、孝子

が嘆き悲しんだ結果、天がその心を憐れんで助けたというような話も多い。「孟宗泣竹」がそれである。孟宗は三国時代の呉の司空である。孟宗竹の名はこれに由来する。

孟宗の母は筍が好きだったが、冬になってしまった。筍は未だ出でこない時期だった。宗は竹林に入って哀嘆したら筍はこのために出で来て、これを取って母に供した。皆、彼の至孝が天を感動させたのだとした。  
(『三国志』三嗣主伝に引く『楚国先賢伝』)

或いは孝子が嘆き悲しむことはないが、平素の親孝行が天を感動させ、願いをかなえさせたというような話もある。例えば「王祥臥氷」がそれである。真冬に生の鯉が食べたいという意地悪な継母の要求に従い、川に鯉を取りに行ったが、河水は凍っていた。そこで、王祥は衣服を脱いで氷の上に寝て自分の体温で氷を溶かそうとした。すると、突然水が溶けて、二尾の鯉が飛び出した(『初学記』歳時部に引く師覚授『孝子伝』)。この王祥は後に魏晉・南朝きっての名族である琅邪の王氏の繁栄の基礎を築いた人物である。

第二の場合は、家が貧しかったり、飢饉に遭って食糧不足になり、孝子は父母の食糧を充分に供給するため、自分の子を犠牲にしようとしたところ、天から援助が降りて、悲劇を免れた、というような話である。「郭巨埋児」は最もよく知られており、これについて晋の干宝が著した『搜神記』には次のように記されている。

郭巨、……の妻が男子を産んだ。巨は子供と一緒にいたら親に仕えることの邪魔になると考えた。これがそのわけの一である。更に、親が食べ物を得たら喜んで孫に分けてしまって、自分の食べるものが減ってしまう。これがそのわけの二である。そこで、

地面に穴を掘って、子供を埋めようとしたら、石の蓋にぶつかった。その下に黄金の入った釜があり、中には赤い字で書かれた文字があって、「孝子郭巨、黄金一釜を汝に賜る」と書いてあった。そこで、彼の名前は天下に広がった。(巻十一)

第三の場合は、父母が長く病に罹り、なかなか治らず、孝子はそれを憂えて、自分の股から肉を切り取って、煮込んで食べさせたところ、天が孝行に感動して病が癒えた、という例である。所謂「割股療親」である。さらに凄まじいのは、肝臓や心臓の一部を切り取るような話もある。所謂「割心」「割肝」の類である。明末の白話短編小説集『型世言』には、陳妙珍が病気の祖母のために「朝晩晩の上に香を立て天に拝み、身を祖母に捧げることをお願い」した揚げ句に、夢で天の指示を得、肝臓を切り取って祖母を救うことを教えられるという話がある。目が醒めた後、

妙珍は言う。「神が教えてくださったのなら、祖母は助かるに間違いない」と。起きて、庭に線香を立て、天に拜んで言う。「妙珍は神の指示に感謝しております。今から肝臓を切り取って祖母を救います。祖母が助かるようによろしくお願い申し上げます」と。そこで服を脱ぎ、左の脇の下に赤い線があるのが見え、刀で赤いところを切るが、皮が破れ、肉が裂けても、全く痛みを感じない。血は出ないが、肝も見えない。妙珍はまた天に拜んで……跪いたら、急に肝が出てきて、妙珍は一切れ切って、……薬と一緒に煎じて、祖母に食べさせた。祖母は一気に飲み干して、間もなく妙珍を呼んで言う。「児、この薬はどこからもらったの。本当によい。食べたなら、のどとおなかには爽やかで、精神気力も盛んになり、手

足も普通に動かせるようになった。この病はだんだん治るかもしれないね」と。妙珍は窃かに喜んだ。後に祖母は日ごとに元気になっていった。(第四回「寸心遠格神明、片肝頓蘇祖母」)

ほかに、『新唐書』卷一九五「孝友伝」にも「唐のとき、陳蔵器著『本草拾遺』にも、人肉が疾病をなおすことができる、という。以後、民間では父母の病を治すのに多く股の肉を切り取って食べさせる」とある。「孝友伝」にはこのような話が三つ記されている。

- 一 何澄粋は池州の人。親の病が日々ひどくなくなったが、土地の風習では鬼をたつとび、薬を飲ませない。澄粋は股の肉を切り取って食べさせ、親の病が完治した。
- 二 寿州安豊の李興……の父がひどい病気に罹り、間もなく亡くなるように思われた。興は刀で股の肉を切り取り、ご馳走だと言って父に出した。父は衰弱して食べることができずに翌日亡くなった。
- 三 章全益は梓州涪城の人。幼い頃父を喪い、兄全啓に育てられた。母は病に罹り、全啓は股の肉を切り取って母に食べさせたら、母の病気が治った。

以上の三つの記録には天は表だって現れていないが、股の肉を切り取るという命の危険を冒した孝心は天を感動させ、その結果父母の病がなおったと庶民は考えていたのであろう。

第四の場合は、親を喪い葬式や埋葬の費用に困ったため、孝子は自分を奴隷として売るが、最後には天は孝子を助けて借金を返して自由な身に戻る、という話である。最も広く伝えられているのが「董永葬父」であり、『搜神記』に

は次のように書かれている。

漢の董永は千乗の人である。……父を亡くしたが、葬る費用がなかった。そこで、自らを奴隷に売って、葬式費用とした。彼の主人は、その賢人であることを知って、銭一万を与えて、自由の身にした。永は、三年の喪を終えてから、主人の所に戻って、奴隷の身分を続けようとした。その途中、一人の女性に会い、こう言われた。「できればあなたの妻になりたい」と。そこで彼女と一緒にになった。主人は、永に言った。「あなたにはお金をあげますよ」と。永は言った。「私は御主人様のお陰で、父の葬式を出しました。永は小人ですが、必ず奴隷の義務を果たして力を発揮しようと思ひ、それでご恩に報いようとするのです」と。そこで、主人は言った。「あなたの奥さんは何ができますか」と。永は言った。「機織りが出来ます」と。主人は言った。「それならば、あなたの奥さんに私のために絹百疋を織ってもらいましょう」と。こうして、永の妻は主人の家で機織りをして、十日で完成した。妻は門を出て、永に言った。「私は天の織女です。あなたの至孝によって、天帝が私にあなたの負債を払う手助けをさせたのです」と。言い終わるや、大空に向かって去って行き、見えなくなってしまった。(卷一)

或いは孝子が墓を守って、急に災害が起こり、墓に被害が起こりそうになるところを、天が助けたという話もある。例えば、『新唐書』に記された許伯会の話がこれである。

許伯会は、……母を失い、土を背負ってお墓を作った。……野火が墓に植えた樹に燃え移ろうとした。そこで天に向かい悲しん

で号泣したら、俄に雨が降り出して、火を消した。(巻一九五)

以上のような話は長く広く民間で流布されており、民衆の価値観と生き方に多大な影響を与えたことは言うまでもあるまい。

『宋書』に次のようなことが記録されている。

郭世道は生まれた時に母を失い、父は再婚した。世道は父及び継母に仕えて孝行を尽くした。十四歳の時にこんどは父を失った。……家は貧しく、これといった家産もなかった。それでも頑張って継母を養った。妻が男の子を生んだ。夫妻は相談して言った。「一生懸命に親孝行をしても、力不足である。もしこの子を養うならば、更に多くの費用がかかってしまう」と。そこで垂泣して子供を埋めてしまった。(巻九十一「孝義伝」)

これは明らかに「郭巨埋兒」を習って起こった惨劇であるが、このようなことも起こったのである。

### 3. 民間信仰が生まれた背景

以上の四つの場合を分析すると、第一の場合には子として親の飲食に対する要求を努めて満足させるべきだというテーマであり、少し行きすぎの嫌いがあるが、『孝経』の「身を慎み用を節して以て父母を養ふ」(庶人章)という本意をまだ逸していない。第四の場合の「身を売って父を葬る」は昔の「貧しくて自らを奴隷として売る」という社会現象を物語っており、本人の命に害が及ぶことは一応ないであろう。

しかし、第二と第三の場合は、事情が頗る異なってくる。股の肉を切るという例は命を失うとまでにはいかなくとも、人体に対する重大な

傷害である。肝臓や心臓を切り取ったり、我が子を埋めたりすることは、自分或いは子孫の命を奪う行為である。しかも、股の肉や心・肝を切り取っても病気の治療には何の役にも立たないのである。これを証明した記載が多くあるにもかかわらず、民間の「割股療親」「割心(肝)療親」の風潮は止むことはなかった。

この風潮の背後には、主に二つのことが考えられよう。一つには既に述べたように、民間の「天」への根強い信仰がある。孟宗の冬の筍といい、姜詩の至孝に霊泉が湧き出たことといい、董永の父の喪に尽くして天女を得たことといい、すべては庶民の天への厚い信仰を反映しており、至誠よく天に通ずという中国人の信念は根強いものがある。

「割股療親」と関連して、孝行の行為には、天への敬虔心を示すために、よく自分の肉体を痛めるシーンが見られる。前述した妙珍が腕に線香を立てるのがそれである。小説とはいっても、実際民間にこの風習があったことは否定できないであろう。同じようなことはほかの史書にも見られる。

益州梓潼の人張楚は母が病気になった。命も危険になった。楚は祈祷してもなお苦悩して、指を燃やして自ら誓った。すると、彼の至誠は天に通じて、病は間もなくして平癒した。(『南史』巻七十三)

二つには、中国歴代の支配者は治国平天下のため、あらゆる方法で「孝」を勧誘したということがあげられる。「現報」といい「応報」というのも、結局は日常実践の効果を促進する一手段に過ぎない。孝道を社会全体に浸透させるために、時の為政者は、先ず、名誉や帛、食糧を与えたりすることで孝行を褒賞した。例えば、漢の武帝はが詔を下して孝行を奨励したり(『漢書』武帝記)、三老閭閻の孝行を表彰したりし

た（『漢書』百官記）。漢の恵帝は帛五匹と免税を（『漢書』恵帝記）、唐の太宗は粟五斛をもって孝行を褒め（『唐書』太宗記）、元の世祖は李徳輝の孝行を表彰したりした（『元史』本紀第四）。次いで、孝子説話を幼童への教訓書とした。多くの孝子伝が作られ、正史にも孝子の伝がもうけられた。『魏書』「孝感伝」が最初のもので、『梁書』『陳書』『北史』の「孝行伝」、『宋書』『南齊書』『周書』『隋書』『南史』『宋史』『明史』の「孝義伝」と続いた。南朝梁の武帝は孝子伝を読むたびに、途中で悲しみ深く感動したという（『梁書』本紀第二）。

社会全体の孝行至上の風潮の中で、「割股療親」「埋児侍親」などは当然称賛された。梁の元帝は次のように言う。

甘い泉がひとりで湧き出したり、火事から父の棺を守るため上にかぶさったところ火が止まったり、親を養う口べらしのため子供を生き埋めにしようと地面を掘ったら黄金が出てきたり、親孝行を助けるため天から天女が下ってきたりするの、孝の行いが天に通じ、感応させた結果であり、大いに称えるべきである。（『芸文類聚』人部孝に引く梁元帝『孝徳伝』序）

宋の文帝は当時の郭世道の「埋児」孝行に対して、わざわざ布告を出してその孝行を称賛した（『宋書』本紀第五）。このような政府の誘導は「割股療親」「埋児侍親」の風潮を助長させ、民が有している天への信仰を強化させたのである。

#### 4. 民間信仰と儒家思想との乖離

しかし、これら「割股」「割心」「割肝」の「療親」は、『孝経』の「父母から与えられた身体髪膚の保全が孝の始め」と矛盾する。また「埋

児侍親」は、少なくとも一人っ子的場合には、『孟子』の「不孝有三、無後為大」と矛盾する。また「親を不義に陥れない」を孝の原則とする儒家の精神に背く場合もある。例えば、『孔子家語』には、曾参が父曾皙の打擲に過度に耐えたことはかえって親を不義に陥れることだとし孔子が叱ったという話がある<sup>8)</sup>。「埋児侍親」も親孝行どころか、親を不義に陥れることになるのである。

これらの行為自体は現代人の目からすれば、荒唐無稽な事にしか見えない。しかし当事者本人から見れば、天への信仰に基づいて行った行為であり、一部は後に述べる礼部のいうような「世間を驚かせ、表彰を求め、用役を忌避しようとする」という功利的な目的で行ったかもしれないが、民衆の多くは信仰のうちにした。彼らは或いは現身応報を以て慰め、或いは身後の果報を説く。儒家の倫理想としての「孝」とは対照的に、民衆における「孝」は宗教的・神秘的な色彩を色濃く帯びていたのである。

こうしたやり方は儒家の倫理想に反するものであるにもかかわらず、これを正面からきちんと批判した儒者は極めて少なかったようである。わずかに、韓愈が「埋児」行為をした者が「死刑にならなかったのは運がよかったので、本当はどうしてその家を表彰することができようか」<sup>9)</sup>と批判しているのが目につく程度である。そして、このような状況はずっと明の太祖の時代まで続いたのである。

明の太祖になって、このやり方は正しくないと判断し、礼部の議論を経て、否定することになり、政府はこの行為を奨励・称賛することをやめようと決めた。嘉靖年間の吏部左侍郎である何孟春の著した『余冬序録』には太祖の頃に起こった次のようなできごとが記されている。

明代の初め、青州日照県の民、江伯兒の母が病んだ。脇の肉を切り取って食事にした

が、治らなかった。岱岳に行って祈り、母の病が治ることを願った。そこで、子供を殺して祭った。その後母は治った。そこで、三歳の子を殺して祭った。この事を聞いて、太祖は怒って言った。「父子の天倫は至って重い。礼によれば、父が長子ならば、三年喪に服する。今庶民が自分の手でその子を殺すのは、倫理を絶滅することで、直ちにこれを捕らえて罪に問う」と。そこで、伯兒を逮捕し、杖百叩きの上、海南島へ流刑に処した。（『余冬序録』巻一、『四庫総目』子部卷一二七）

このことが起こった後、太祖は「礼部に命じて詳しく孝行事例の表彰について議せし」め、その結果、次のような意見が出された。

子の親につかえるに、日常生活において敬い、扶養するに楽しませる。病気があれば、良医を頼み、常に善薬を出す。天を呼んで神に祈る時は、これは人間の懇切の至情で、人の子の心の止むことのできないものである。氷上に臥したり股を切り取ったりするが若きは、古に無いところである。このような事は後世に出てきたことで、間が抜けたことである。肝を切り取る行為は、傷害の大なるものである。しかも父母に子供がただ一子しかない場合はどうか。股を切り取り肝を切り取ったら死ぬかもしれない。氷上に臥したら凍死するかも知れない。そうならば父母が頼りとする者を失うのである。祖先を祭る主もいなくなる。かえって大不孝となるのではないか。その目的はと言えば、愚昧の徒が一時的に激発して、奇怪なことを行って、世間を驚かせ、表彰を求め、用役を忌避しようとしているのだ。股を切り取るに止まらず、子を殺すに至る。道に背き命を奪うこと、これより甚だしい

ことはない。今からは、人の子が父母の病に遇い、医療で治らず、ぶつける先がなくなって、やむを得ず氷上に臥して股を切り取る者は、勝手にさせて、表彰の対象にはしない。（同上）

何孟春も儒教的な立場から批判を加えた。

そもそも孝は親に仕えるゆえんである。もし礼を以てしなければ、一日に三頭の豚を用いて親を扶養するといっても、なお不孝である。ましてその親の食事のために無辜の幼子を殺そうとしていいのだろうか。昔君子は鹿の子を礼物としたが、殺すのに忍ばず放した。況や子孫をや。郭巨は、親を不義に陥れ、その罪は莫大である。これを孝と言うならば、天理は殆ど滅んでいる。その孝はお手本とするべきだろうか。或いはこう言うかも知れない。「もし不孝とするなら、どうして天がこれに金をさずけたのか」と。ああ、もし不幸にして金を得られなかったら、死者は生き返らないし、子を殺した罪を逃れることもできないし、跡継ぎのないという大罪を犯すことにもなる。どうして孝と言えようか。その親に惻隱の心がなければそれでいいが、あるならば、どうしてその後の人生を平気で送れるだろうか。志を養う者はまことにこのようであるだろうか。ただたまたま運がよかつただけなのだ。お節介な人は、その非義の行いを美とし、名教を乱していることに気づいていない。ひどいものだ。人が奇異なことを好むのは、その通りである。或いは、天がその子を哀れんでこれを助けるのか。そうでなければ無辜の子が生き返ることはできない。（同上）

儒家の批判は理性的で妥当なものである。し



かし、民衆の意識に影響を与えるまでには至らなかったし、太祖もこれら股を切り取ったり子供を埋めたりする行為を放任しただけで、禁止したわけではない。むしろ「孝」は太祖からそれまで以上に奨励されるようになった。

「孝」の規範を郷村社会に浸透させるために、太祖は「六論」すなわち「孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非為」という六箇条を定め、木鐸老人に里内を唱えてまわらせ、郷村における紛争を処理する際にもこれを規範とした。范巖の『六論衍義』<sup>(10)</sup>に代表される各種の演訓書（宣講用に内容を敷衍したもの）が作られたり、家訓にも受容されるなど、「孝」は社会全般への浸透を見せた。

清朝においては、為政者は「六論」の宣講を積極的に進め、順治帝は『六論衍義』を「六論臥碑文」として各官庁各地域に頒行し、康熙帝は「六論」に代えて十六条の「聖諭」を発し、ついで雍正帝は「聖諭広訓」を定めたが、家族・宗族内の道徳を重視する基調は「六論」と変わらない。

こうした皇帝の権威を背景として勸戒は、『太上感應篇』『孝順格』<sup>(11)</sup>といった善書などの比較的民間的な文字媒体とも連続するようになり、「孝」の規範はそれらによっても宣揚された。さらに、郭巨・王祥・孟宗・董永などの孝子の話をまとめた『全相二十四孝詩選』<sup>(12)</sup>が、絵解きによる幼児教育に広く用いられるようになったのである。

## おわりに

「孝」についての儒家思想と民間信仰との乖離はどのように理解すればいいのだろうか。

第一に、政治的領域を媒介にすれば、それが全く乖離しているのではなく、ある種の相互交渉があることが見えてくるように思われる。儒家は単なる倫理想ではなく政治思想を含んだ

ものであり、儒者は政治家でもあった。政治の側もこれを大いに活用した。その一方で、政治は民衆を統治するためにその信仰であれ感情であれ、これを利用した。利用するあまりにそれを煽り、揚げ句にかえってその過剰を抑える必要が生じるということもあり得た。そのような局面でも政策を具体化させるのはやはり儒者であった。明の太祖が「孝」を奨励し「聖諭六言」を発しながらも「孝」の行き過ぎを罰し、臣に対策案を出させ、何孟春が「孝」の過激を批判したように。

第二に、儒家の語る言葉、ひいては儒家思想の中に既に乖離があるように見える。例えば、先に引いた『孔子家語』では無条件に父に従うのを非とする。しかし、子は父のために偽証するのをよしとしたのも孔子その人である（『論語』子路篇）。しかも、父に従うのは「孝」であるが、これを非とする根拠もまた「孝」なのである。これは儒家思想が一つの価値観に偏して激することを避け、現実的な有効性を重視するからであるように思われる。それに対して、民間信仰は時に激越に走ることを止める装置がない。「孝」の価値観に徹底し、「天」の至高性に単純にすがるのである。しかし、儒家思想もそれ自身の内にある種の乖離を含んでいるがゆえに、親に無批判に従うが如き民衆の信仰に連続する面もあるのである。

## 注

- (1) 『大紀元時報』または「中国新聞網」2004年12月2日。
- (2) 思想の分野では次のようなものがある。桑原隲藏『中国の孝道』講談社学術文庫、1977年。津田左右吉『儒教の実践道徳』岩波書店、1938年。渡辺浩『近世日本社会と宋学』東京大学出版会、1985年。加地伸行『儒教とは何か』中央公論、1990年。文学の分野ではこのようなものが挙げられる。徳田進『明清時代の治政策と主要孝子説話集』『高崎経済大学論集』九、1963年。滝沢俊亮『孝子説話について』『中国の思想と民族』校倉書房、1965

年。下見隆雄「孝の本質を点検する——孝子説話を中心に——」『孝と母性のメカニズム』研文出版、1997年。

- (3) 『孝経』は先秦末期の成立とされる。孔子がその門人曾参に孝道を述べたのを、曾参の門人が記録したものとされている。
- (4) 正史には、隋の煬帝（『隋書』帝紀第二）、唐の高宗（『旧唐書』本紀第四）、玄宗（『旧唐書』本紀第八）、代宗（『旧唐書』本紀十一）らの皇帝に対して、仁孝・孝友の評価の与えられていたことが記されており、孝は皇帝自らが実践し、民を教化するためのイデオロギーであった。
- (5) 例えば、『唐律』では、一般に他人を殴った場合は笞打ち四十であるが、祖父母・父母はこれを罵っただけで絞首、殴れば斬首に処せられる。これに対し、教えを守らない子・孫を祖父母・父母が殴り殺しても一年半の徒刑ですみ、過失致死ならば無罪となる（名例律）。父母の喪中に婚姻関係を結んだりすれば、三年の徒刑に処せられる（戸婚律）。
- (6) 『後漢書』にこんなことが記されている。

諒輔は字は漢濡、広漢新都の人である。……夏のこと、旱魃があった。太守自ら中庭に身を曝したが、雨は降らなかった。……自ら誓って言った。「輔は郡の官僚である。人の諫めと忠を受け入れたり、賢を薦め悪を退けたり、百姓と調和することができなかったので、天地が一体とならず、万物を枯渇させるに至った。百姓はあっぶあっぶで、訴えることもなかった。咎めは全て輔にある。今、郡の太守である輔は反省して己を責め、自ら中庭に身を曝して謝罪し、民のために福を祈らせよ。至誠は充分であったが、天は未だ感じない。輔は、今、自ら誓って、もし昼になって雨がなければ、身体をもってこの責任を取ることを請う」と。そして薪を積んで、自分を焼いた。昼になって、山の雲が黒くなり、雷が起り、雨が大雨りし、一郡を潤した。（巻七十七「諒輔」条）

- (7) 中国語では、親しい友達を「老李」「老張」と呼ぶように、「老天」は「天」に対する親しい呼び方である。また、「老天爺」は、ある年長者を「老大爺」と呼ぶように、敬愛の気持ちを込めている。「天公」は、あたかも徳の高い年長者を「某公」と呼ぶように、天を尊敬した言い方である。
- (8) この話は次のようなものである。

ある時、曾子が瓜畑の雑草取りをしていて、誤って瓜の根を断ち切ってしまった。曾皙は怒って大きな杖を振り上げて曾子の背をなぐりつけた。曾

子は地に倒れて長い間気を失っていた。……孔子は、この話を耳にすると怒って弟子にこう言った。

「参がやって来たなら、内に通してはならぬ」と。曾参は自分に罪はないと思ったので、人をたててその理由を孔子に尋ねさせた。孔子は言った。「お前は聞いたことがないのか、昔、瞽叟に子がいて舜といった。舜が瞽叟に仕えるには、父が舜を使おうとすればいつも側に控えていた。舜をさがして殺そうとしたときには、逃げ出して決して捕らえられなかった。小さな杖で打たれるときには、終わるのをじっと待ったが、大きな杖のときには、逃げていった。だから瞽叟は、父としての道を踏み外すという罪を犯さずに済んだし、舜は、子殺しをさせないという孝を失わなかったのだ。今、曾参が父にお仕えしたのは、自分のすべてを父にまかせて、その乱暴な怒りを受け容れて、倒れても避けようとしなかった。それが原因で自分が死んでしまい、父を不義に陥れたなら、これ以上の不孝があろうか」と。（『孔子家語』巻四 六本）

- (9) 原文は見付からない。ここでは何孟春の『余冬歳録』巻一に拠る。
- (10) 日本でもこの書は後に幕府に献上され、吉宗は、荻生徂徠に訓点を付けさせて刊行し、さらに室鳩巢に命じて和訳させ、『六論衍義大意』の名で刊行した。この和訳本は各藩で広く読まれ、寺子屋の道德教育の教科書として使われて庶民教育に寄与した。明治の教育勅語にもこの影響が見られる。
- (11) 「功過格」ともいう。例えば、一日父母に仕えて喜ばせるのは一功となり、十五日間力を尽くして父母に仕えて倦まないのは十功となるのに対して、父母に仕えながら不満を言ったり、怒らせるのは一過となり、利益のために父母を騙し、教育しても従わないのは十過となる。
- (12) 撰者は元代の郭居敬（郭居業ともいわれる）とされる。歴代の孝子の伝承の中から二十四人を選んで、凶像の賛である詩と小伝からなる短編説話集である。中国の孝子譚は日本にも入った。既に、『今昔物語』巻九に郭巨、孟宗などの話があるが、江戸時代になって、儒教思想を本格的に受け容れるにつれて、孝子物語も花を咲かせた。綱吉は天和二年（1682）忠孝の高札を立てて全国の孝子を表彰し、不孝者を処罰した。孝行奨励の社会風潮のもとで、『孝行物語』（1660）、『親子物語』（1663）、『日本二十四孝』（1665）、『肥後孝子伝』（1666～1755）には孝子六十二人が挙げられ、『孝義録』（1742）のように全国地方別に善行を書き連ねているものなどが相次いで出た。これに対し

て、西鶴は『本朝二十不孝』(1686)を著して神秘的で不自然な孝道の不合理性に対抗した。